

+

2022年

5月第4・5週の主日礼拝説教要約

・5月22日：使徒言行録 1：6-11.

「天に帰る神」

・5月29日：使徒言行録 1：12-14.

「新たなる旅立ち」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず、と告白するときに、私たちは天も地も、ほぼ同時に神の手によって創造された神の被造物であることを認めます。創世記のはじめの天地創造の記述から、永遠なる神は元来、天にも地に属さない、時空を超えた存在だったことが明かされます。

神は先ず、御自身の被造物である天に居場所を得て、今度は地上にも居場所を得たのが、世に降った神、イエス・キリストの生まれた中東地域でした。また、神キリストが天に弟子たちの居場所を設けるという約束を記したヨハネ福音書14章からもわかるとおり、神も人も永久に天と地の、どちらか一方に縛られる運命にはないのです。

古代のイスラエルの民が430年間移住していた(出エジプト記12:40)というエジプトでは太陽神が根強く信仰されており、この神が天地の創造者であると誤解されていて、イスラエルの民がどの程度、同調圧力を受けていたのかは定かではありません。ただ聖書は、その太陽も含めて私たちと全く同じ被造物であることを教えています。聖書の神以外の全てはモノ(被造物)であるという教えは、科学の進歩に大きく寄与する精神となります。

最初に何も人工物のない月に降り立ったアメリカの宇宙飛行士が、神(=創造主)の存在を身近に感じたという発言は、天空もまたその神の被造物であることを実感した飛行士ならではの率直な感想でした。

さて、キリストの昇天は、神の被造物である天でキリストが待機するためでありまた、そこから再臨するためでもあることを聖書は教えています。このように天と地は、けっして隔絶されたものではなかったことを1世紀のキリスト教徒はイエス・キリストの言葉を通して学びとったのです。

その天にキリストが帰る直前に、弟子たちは再び愚かな質問をぶつけます、「主よ、イスラエルのために国を建てなおしてくださるのは、この時ですか」と。「この時」とは、今この時に、最後の期待をかけていることを意味しています。つまり、何もしないで去って行かないでほしい、残された者たちが路頭に迷うことがないように、と。

けれどもイエスの答えは、父なる神の意志を今は伝える時ではないことを告げます。

弟子たちが路頭に迷わないための方策は、けっしてイエスが地上にイ

イスラエル王国をあらたに建国することではなかったはずです。しかし弟子たちの頭の中には未だそのイージしかありませんでした。勝利といえはローマ帝国を打ち破ること、神の国といえはイスラエル王国の建国、これ以外のことは理解不能に陥っていたのです。

わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。(ヨハネ福音書3:12)

ニコデモに対して語られたこの言葉は、例外なく弟子たちにも妥当したのです。語られた多くの言葉の奥義が伝わることもなく。

羊飼いを失った羊がちりぢりばらばらになるのは時間の問題でした。イエスは御自身の予定どおりに天に帰られます。もう、だれも止めることはできません。

復活後、40日間、地上に留まったイエスは一時、弟子たちと共にガリラヤ湖の湖畔で過ごされましたが、再び彼らと共にエルサレムに戻っていたようです。

すぐ近くの、なぜか「オリーブ畑」と呼ばれる山で、イエスと弟子たちは最後の別れをしました。

天に帰られた10日後に異変(聖霊降臨)が起きるのですが、誰もまだそのことは知りません。この10日間、彼らの中では気の遠くなるほどの時間が流れていたであります。

その頃、イエスの許にではなくペトロの許に多くの人々(約120人)が集っていた理由は不明です。考えられることとしては、イエスの死後、当局の取締が緩和されていたことくらいでしょうか。路頭に迷う恐れのある人々は、直弟子たちだけではなかったようです。人々はイエスの復活に接していたのでしょうか、彼らの中に当局者は潜伏していなかったのでしょうか、謎だらけです。しかし、説明不可能なことでも事實は事實として記載するのが著者の務めです。

たしかに復活後に、ガリラヤで、「わたしの羊を飼いなさい、世話をしなさい」と命じられていたのはペトロですから、身を寄せて来た人々の世話係は彼の任務となるはずでした。イエスのお手本に習い、ペトロがその任務を、すでに果たしはじめていたのかもしれませんが。イエスを失った集会は前途多難なことばかり、未来が全く見通せなかった10日間のことを、彼らは一生忘れなかったであります。